慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	倉田稔君学位授与報告
Sub Title	
Author	倉田, 稔
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1981
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.74, No.6 (1981. 12) ,p.676(116)- 679(119)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学位授与報告
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19811201-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

倉田　稔君学位授与報告

報告番号　甲第617号
学位の種類　経済学博士
授与の年月日　昭和56年3月31日
学位論文題名　「金融資本論の成立」

内容の要旨

「金融資本論の成立」論文要旨

倉田　稔

オーストロ・マルクシストの1人，ルードルフ・ヒルファディング（Rudolf Hilferding, ウイーン1877年—パリ1941年）は，19世紀末から20世紀初頭にかけて，ヨーロッパ社会民主主義運動で最大の議論であった修正主義論争の真ただ中にあって，正統派マルクス経済学の立場から，ベルンシュタイン理論の克服を志した。

かれをはじめて有名にした「ベーム＝バヴェルクのマルクス批判」（1904年）で，近代経済学によるマルクス批判への反批判と，同時に，限界効用価値説に助けを借りているベルンシュタインの批判を行った。その後，マルクスの考察しなかった新しい時代の資本主義の研究をすすめた。修正主義論争が関税政策をめぐって行なわれていた時，かれは「保護関税の機態変化」（1903年）を発表し，新しい資本主義を，育成関税から高率保護関税への機能変化という視点から把握する。続けて『ノイエ・ツァイト』に発表する国民経済学とストライキ論争にかんする論文で，修正主義理論を批判しつつ，関税政策論を中心とする帝国主義認識をもちつづけた。

ヒルファディングがドイツに移った1907年に，ドイツ社会民主党（SPD）に，植民地問題，帝国主義，ミリタリズムの論争が本格化した。オットー・バウアー『民族性問題と社会民主主義』（1907年）やパルヴス『植民地政策とその崩壊』（1907年）などから，帝国主義認識で影響をうけ，また1907年恐慌を自ら分析する中で，ヒルファディングは，かれの帝国主義論を深化させた。

1910年前半に公刊した『金融資本論』は，20世紀資本主義をマルクス経済学の方法と理論を用いて創造的に分析した書であり，あわせて，ベルンシュタインの経済理論を批判・克服した作品である。その書の構成は，大体においてベルンシュタインの書『社会主義の諸前提と社会民主主義の諸課題』の経済学的部分に照応している。また，株式会社→取引所→金融資本→帝国主義とすすむ理論展開は，修正主義批判という意識にひきずられている一方，20世紀資本主義の特徴と重要現象を的確にとらえている。ところで，『金融資本論』は，ドイツ・オーストリアの資本主義を典型として理論化したものであり，それはとくに，取引所論をめぐって集中的にあらわれている。また国内経済政策論では，伝統的なSPDの立場，すなわち中間階級が結局は反動的になるという説に立っている。

『金融資本論』公刊後にあらわれた多くの書評は，この書が修正主義批判としての意義をもつと確認しており，事実，ベルンシュタインは真向から反批判を加えた。ローザ・ルクセンブルグは，しかし，意識的に無視している。

ヒルファディングは，『金融資本論』では，帝国主義が社会主義かという問題を立てたが，続「金融資本論」ともいうべき連続論文「貿易政策の諸問題」（96—17）では，労働者階級の経済政策として，自由貿易を提唱する。

レーニンの『帝国主義』は，ほとんど，その純経済学的部分（1—7章）については，『金融資本論』の理論を採用し，書き改めたものである。もっとも独占体の意義の強調，労働貴族論，不均等発展論などに長所をもっている。レーニンは，株式会社論，関税論，植民地論など，そして編別構成を注意深く叙述し，ヒルファディングのようにヨーロッパ大陸に適合的な理論ではなく，ほとんどの帝国主義国に妥当する理論をつくりあげた，いわば，帝国主義の概念を拡大した。かれは，第一次大戦の勃発と第二・インタナショナルの崩壊を目前にして，一部社会民主主義指導者を批判し，すべての帝国主義を断罪する必要があった。『金融資本論』がベルンシュタイン批判から生れたのに対して，『帝国主義』とその長所は，その課題としてのカウツキー主義批判から生れた。

両書とも，国際社会主義運動の左派の立場から，当時の死活的理論問題に対して与えた解答であった。この二つの帝国主義論の，理論と方法は，時代の課題によって規定されたのである。

論文審査の要旨

倉田稔君提出の学位請求論文『金融資本論の成立』は，わが国におけるヒルファディング研究に新しい方向を拓くものとして，まず受けとめねばならない。わが国にでは，戦前すでにヒルファディングの『金融資

本論』の反訳がおこなわれ（林要訳，改造文庫版），『金融資本論』の解説，紹介的研究もなされている（例えば猪俣津南雄をみよ。また，戦後では，林要をみよ）。これらは，たしかに，ヒルファディングの存在を知らしめるうえでは大きな役割をはたしたに相違ないが，真にヒルファディングを評価し，その全体像に迫るには，ほど遠いものであった。これには，戦前段階において，ヒルファディングに対して向けられた評価が，「流通主義」ないし「修正主義」（revisionistisch）というものであり，この評価に抗しうるようなヒルファディング像を打出すことが，イデオロギー的に困難であったという，独特な事情が関与していたことも否定することはできない。本論文は，戦後のヒルファディング研究がこうした情況から脱却しようとする，新たな方向を示すものであるといってよいであろう。

戦後のヒルファディング研究は，まず第1に，かれの主著『金融資本論』の内在的・批判的研究が深められたこと，第2には，『金融資本論』のみならず，ヒルファディングの理論的活動全体を通じて，ヒルファディングの全体像の構想という，思想史的，学史的課題が定着したこと，第3に，ヒルファディングをとりまくヨーロッパの思想情況，とりわけ，ドイツ社会民主主義史や，中央ヨーロッパ社会史の研究も，飛躍的に発展したこと，等々の要因によって，戦前段階とは質的に異なった研究水準を達成するにいたっている。結論的にいえば，倉田君の論文（同時呈出の副論文を含めて）は，上記の三つの視点のすべてにかかわるものを内含した，たんなる伝記的研究の域を越えるヒルファディングの綜合的研究を意図するものとしても注目に値いするということである。

上述の三視点の進展には，『金融資本論』のみならず，ヒルファディングの知的活動の全貌を知るための資料の発掘がまず必要なことはいうまでもない。さいわい倉田君等の調査によって，これらが，アムステルダムの『社会史国際研究所』等に所蔵されており（旧社会民主党文庫），またヒルファディングの活動の拠点の一つであったWienにも多数存在することがあきらかにされた。これらには，ヒルファディングの書簡，パンフレット類が含まれている。これにDie Neue Zeit誌所収の論文，Die Gesellschaft, Kampf等の機関紙への寄稿文，SPD USPDの党大会のPvofokoll，ワイマール時代の歴代内閣の閣議記録等々によって，いまやヒルファディング関連資料はほとんどわれわれの前に用意されるにいたっている。倉田君自身がのべるように（本論文序），これらをふまえないヒルファディング批判は，もはや十分なものとはいえない。

しかし，他方，ヒルファディングの問題性は，経済学史や思想史，社会史などの分野にまたがる「歴史的対象」にしかすぎないかというと，そうはいい切れない。本論は，究極的には，この点についての明確な対応を欠いているとしなければならないが，ヒルファディングの現実性は，マルクス以後のマルクス主義の直面している現実的課題とかかわっている点にあるといってけっして過言ではないのである。こうした観点にたって『金融資本論』を見直す作業や，かれの提起した「組織資本主義論」の現実的課題（これについてはWinklenをはじめとする西独のいわゆる社会史派の企図を参照）をあきらかにすることも，ヒルファディング研究の重要な一側面であることは，明確にしておかれるべきことである。

さて，本論文は序章以下全六章から構成されている。まず序章で著者は経済学史研究の方法について検討する。経済学史の方法を，文献史的・記述的方法と，理論史的・傾向及び方法，歴史的方法に三分し，それぞれを解説している。とくに第二，第三の方法の綜合によって記述されるべしとの主張がのべられている。この三分法そのものは，すでにしばしば主張されているところで，さして新味はない。また，第二，第三の綜合というのも，今日の学史研究の現状からして当を得たものである。しかし，これが，ヒルファディング研究にとって，とくに要請される方法であるかどうかという点では，不明なところを残しているといわねばならない。しかし，著者がこの序章によって，本論文が経済学史的研究であることを鮮明にされている点は，留意されるべきであろう。

第一章『金融資本』の成立は，本論文中，最も精彩を放っているものである。戦後，数あるヒルファディング研究のなかにあって，この章のような水準での実証的研究はなされてこなかったことを考えると，本論文は，この章あることによって，学位請求論文にふさわしいものとなっていると，してよいほどである。また，この章は，『金融資本論』の成立過程を追跡することによって，ヒルファディングによるベルンシュタインの修正主義への批判がなされていることを強調する点においても，かつてのヒルファディング研究にはない新たな問題意識が付加されている。それは，ヒルファディング自身が一少なくとも『金融資本論』のヒルファディングが一主観的には修正主義的なものを志

向したものでないことを反面において主張しうるからである。著者は，「『金融資本論』は修正主義経済理論の内在的批判をその実践的課題としていた」(10ページ)とはっきりのべている。

ヒルファディングによる経済理論的論究の最初のものは，有名なベームニバベルクのマルクス批判にたいする反批判である。これは，ヒルファディングの初期の一『金融資本論』以前の一諸文中にあって，以下の理由により出色のものである。第1に，ヒルファディングが，マルクス『資本論』の論理構造を価値法則論を軸に理解しようとする試みであること，第2，修正主義批判を背景に意図した，マルクスの方法の積極的展開となっていること，等である。これは，1904年に公刊され，ヒルファディングの理論家としての地位を確立するものとなるのである。倉田君は，この論文のもつ修正主義批判の側面に着目しつつ，ヒルファディングの意図に反してこの論文の公刊が若干おくれたことと，かれの修正主義批判へのより現実的党内外の問題への対応とをからめ，カウツキーとの間に交された書簡を通じて，『金融資本論』へと結実してゆく理論的営為の過程をきわめて生き生きと描いている。カウツキーあて書簡は，一部わが国においても紹介されているが，倉田君は，このほぼ全貌を開示している。また，ヒルファディングがすでにウイーン時代に，エンゲルスの『資本論』編集に大きな関心を払い，かつ，エンゲルスの『資本論』への補遺である「取引所」論に注目している。これは，倉田君の本論文の第2章の課題の学史的背景をあきらかにするものとなっている。この点も，従来は，大方理論的にのみ問題とされてきていたことからすれば，倉田君の課題設定は，きわめて新鮮で，興味深い。

第一章第一節四は，バウアーの『民族性問題と社会民主主義』に関連させつつ，『金融資本論』の帝国主義論史との関連を問題にしている。ヒルファディングが，バウアーを，いわばオーストロマルクス主義的帝国主義論を，批判的に克服することによって，経済領域論，経済学的な帝国主義論を構想しえた過程の分析に，われわれは，『金融資本論』のもつ帝国主義論としてもつ先駆的意義にかんする倉田君の高い評価を知りうるのである。

第二節『金融資本論』の創作過程において，著者は，『金融資本論』の刊行までの過程を追跡している。恐慌論帝国主義論の研究に予想外に手間どっている。その理由の一端は，上述したところからもあきらかである。

第三節『金融資本論』の課題で倉田君は，ベルンシュタインの『諸前提』の「経済学的部分」(57ページ)と，ヒルファディングの『金融資本論』の課題とを対比し，カウツキーによって取り上げられた農業問題をのぞく部分が，ヒルファディング自身の課題（ベルンシュタイン批判）となったとしている。このような対比による検討は，きわめて示唆的なものである。というのも『金融資本論』の実践的課題が，そこから明白に浮び上ってくるからである。倉田君は，このような対比を経て，ヒルファディングの課題を当然，第二篇以降に求めようとする（第一篇については，これを導入部と位置づけている）。とりわけ，株式会社論をとらえ，資本蓄積と株式会社との関連に止目しつつ，株式会社の支配構造を問題とする。また，この問題との関連で取引所が論じられるとする。これが金融資本の理論構成への橋渡しとなるとしている。

倉田氏が，ヒルファディングの株式会社論に注目するのは，きわめて正当な対処である。帝国主義期の独占資本の資本蓄積の主要な条件の一つが株式会社制度であるからである。しかし，株式会社制度は，独特の機能面をもっており，ヒルファディングには，この側面にかんする鋭い観察もみられる。問題は，このような機能面と，さきの支配構造（所有構造）とがいかに結びついているかである。そのさい，われわれは，ヒルファディングによる銀行資本ないし銀行信用の理解を立ち入って問題にせねばならないと考える。本論文では，この点の論及はなお不十分なものを残しているし，その理由は，『金融資本論』第一，二篇の論理的関連についての理解の不十分さに帰せられるのではなかろうか。

こうした展開をうけて，倉田君は，金融資本範疇の構成への媒介環としての取引所論の分析をなす（第二章）。

ヒルファディングの取引所論は，倉田君によると総じて，株式取引所については，銀行が取引所を簒奪する過程についての分析だということになる。ヒルファディングは，資本主義の発展につれて，取引所の意義が次第に限定されたものとなってゆくことを主張していいのであるが，これと，銀行による取引所機能の代行との間には，資本主義の組織性の展開が介在しているというのが倉田君の結論である。このこと自体は正しい指摘である。また，修正主義批判の核心である株式会社論が，組織された資本主義論を胚胎するという

ことは，まことに興味深い—ただし倉田君が，こうした問題を正確に把握していくとの前提に立ったうえで。

本論文は上述のような『金融資本論』の形成とその理論展開を追跡するのみならず，帝国主義論史の一環としての『金融資本論』という課題をも同時にはたそうとするもので，この点，本論文第四章『金融資本論』から『帝国主義論』へ，は，倉田君の帝国主義論史の方法を知るうえでも，大変興味深い。周知のように，レーニンは，『帝国主義論ノート』の中で，ヒルファディングをしばしば検討の対象としているばかりか，基調として，肯定的に評価している。従来この評価については否定的側面のみが強調されるきらいがあり，それは，ヒルファディングを「修正主義」「流通主義」とする批判に，つながっていた。倉田君の評価は，こうした「通説」から自由になっている。倉田君は，レーニンが『帝国主義論』を『金融資本論』に影響されつつ準備し，それを克服する過程に注目していて，本章は，レーニン帝国主義論成立の事情の解明としても大きな貢献をなしえているといってよいであろう。また，同じような現象をとらえ，きわめて対照的な構成によって帝国主義論を構想したことは，帝国主義論の方法におけるヒルファディングとレーニンの根本的差異をあきらかに示唆する点で興味深い。とくに後者の論点は，通説的立場からはかく理解することを当然として，その根拠を問わない方法に結びついており，倉田君は，この理解の仕方の真の内容を問うているとしてよいであろう。

本論文は，マルクスおよびエンゲルスの理論を継承しつつ，オーストロ・マルクス主義者，とりわけ Otto Bauer の影響を帝国主義論の領域で深く受け，更にカウツキーの帝国主義やパルブスの帝国主義論からも多くのものを吸収しつつ，ベルンシュタインの修正主義に対決する形で，独自の帝国主義論に到達したヒルファディングの『金融資本論』を中心とした分析であるが，その実証的態度，とりわけ著者の原史料（＝第一次史料）への取り組みはまことに敬意に値する。だが難点をいえば，ヒルファディングの『金融資本論』において果した役割としての「修正主義批判」と，本論文の副題としての「ヒルファディングと帝国主義論史」の観点が，充分に整合的に把えられているとは言い難い。前者，すなわち，ベルンシュタインの修正主義批判においても，価値論などの領域において今少し詳しく考察されることが望ましい。また帝国主義論史という観点からするならば，カウツキー帝国主義論とバウアーのそれとの関連，しかもその両者から深刻な影響をうけたと思われるヒルファディングの立場が，必ずしも鮮明ではない。ひとつは，オーストリア社会民主党とドイツ社会民主党の戦術・戦略的な問題にかかわるが，彼自身，ＳＰＯに加入していることをみれば，その帝国主義論は，かなりカウツキーに近づいたということができないであろうか。

さらに，彼のこのような帝国主義論は，晩年，1920年代の「組織された資本主義論」を導き出したのであるが，これらの関連について，著者から今少しきくことができたらと思う。

以上，倉田稔君の提出した学位請求論文の骨子を，評者の疑問点を，その都度あきらかにする形でみてきた。本論文は，ヒルファディングの学史的検討および，帝国主議論史という比較的新しい研究分野の今後の展開の出発点とされるべき成果を示しているといってよく，本論文が，経済学博士の学位請求論文として十分な内容をもっているものと判断する。

論文審査担当者　主査　飯田裕康
同　副査　黒川俊雄
〃　飯田　鼎